**前書き**

日本は、北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、そしてフィリピン海プレートという四つのプレートの上に乗り、それら四つのプレートのずれによって太古の昔から地震と津波、火山噴火という大きな自然の災害を受けてきました。さらに不運なことには、そこは台風が通過するルートでもあり、暴風雨、洪水、鉄砲水、地滑りなども各地で度々起こります。

でも試練は受ける者を強くしてくれます。太古の昔からそれらの災害を受け続けた民族は鍛えに鍛えられて、他国と比べてみれば天災を苦ともしなくなってしまったかのようです。それが311の東日本大震災の時に日本人が見せ世界が賞賛した態度です。でも日本人が災害の時に見せる態度に驚く外国人は、幕末の頃から続いています。

１８６６年１１月２６日の横浜の大火を見て．．．「ここへ来てみると（噂は）まったく根拠のないことが判明した。日本人自身、西洋人よりはるかにひどい火災の被害をうけていて、それにもかかわらず、あっぱれな勇気と賞賛すべき犠牲心と沈着さを発揮して、西洋人の貴重品を無事に運びだす手伝いをしたのだった」

「日本人はいつに変わらぬ陽気さ呑気さを保っていた。不幸に襲われたことをいつまでも嘆いて時間を無駄にしたりしなかった」

「日本人の性格中、異彩を放つのが、不幸や廃墟を前にして発揮される勇気と沈着である。ふたたび水の上に浮かび上がろうと必死の努力をするそのやり方は無分別にことにあたる習癖をまざまざと証明したようなもので、日本人を宿命論者と呼んでさしつかえないだろう」

エドゥアルド・スエンソン　デンマーク人フランス海軍中将(1842～1921)

「江戸幕末滞在記」 自著、長島要一訳　講談社学術文庫

「日本人とは驚嘆すべき国民である。今日午後、火災があってから36時間たつかたたぬかに、はや現場では、せいぜい板小屋と称すべき程度のものではあるが、千戸以上の家屋が、まるで地から生えたように立ち並んでいる。まだ残骸がいぶり、余じんもさめやらぬうちに日本人はかれらの控えめの要求なら十分に満足させる新しい住居を魔法のような速さで組み立てるのだ。

火事の前には僅かの畳と衣服以外に多くの所持品があったわけでもないから失ったものも少なく、あれこれと惜しむこともあまりないのである。これらの事実や、また日本人がいかなる悲運でも、これをトルコ人以上の無頓着さで迎えることを書物で知っていたにもかかわらず、なおかつ自分はこれらの人々の有様を見て驚嘆せざるを得なかった。

小屋がけをしたり、焼跡をかき探したりしていないものはといえば、例の如く一服つける楽しみにふけっている。女や男や子供たちが三々五々小さい火を囲んで座り、タバコをふかしたりしゃべったりしている。彼らの顔には悲しみの跡形もない。

まるで何事もなかったかのように冗談を言ったり笑ったりしている幾多の人々を見た。かき口説く女、寝床を欲しがる子供、はっきりと災難にうちひしがれている男などはどこにも見当たらない。」

エルヴィン・ベルツ(1849～1913)ドイツの医学者「ベルツの日記」

1856年、下田を台風が襲い１／３が破壊され、台風が去ったあとの日本人の態度を見て．．．:

「日本人の態度には驚いた。泣き声ひとつ聞こえなかった。絶望なんてとんでもない！彼らの顔には悲しみの影さえもなかった。それどころか、台風なんてまったく関心がないという様子で、嵐のもたらした損害を修復するのに忙しく働いていた」

岩波文庫「ヒュースケン日本日記」青木枝朗（訳）

太古の昔から天災に遭っては復興を強いられ続けてきた日本人。災害に鍛えに鍛えられ、度重なる復興は忍耐力と工夫を生みます。そして四季を通じて順番にやってくる暑い夏と寒い冬。その間に挟まれた過ごしやすい春と秋。一年中暖かくて気候が良いと、長い進化の過程で人間はどうしても怠けて働かなくなってしまいます。それは暖かい地域には怠け者が多いことで証明されています。

さらにはアジアの最東端に浮かぶ島であるという地理的な条件。大陸から攻めて来られるというリスクはあるものの、日本海がそれをある程度妨げてくれます。移動手段が発達した今日ではそれほどではありませんが、船の発達で西洋人がそれまで未開の地であったアジアやアメリカ大陸に行き始めるまでは、日本海も大きな壁となって立ちはだかっていました。

Inhaltsverzeichnis

[1 - 15世紀末の世界の様子 4](#_Toc476045821)

[2 - その頃の日本は？ 7](#_Toc476045822)

[3 - 明治維新と日清、日露、第一次世界大戦、そして大東亜の四つの戦争 12](#_Toc476045823)

[4 - 世界トップレベルの技術力 15](#_Toc476045824)

[5 - 日本(人)の使命 16](#_Toc476045825)

# 1 - 15世紀末の世界の様子

コロンブス、バスコ・ダ・ガマ、マゼランなどのヨーロッパ人たちによるアジアやアメリカなど、当時のヨーロッパでは知られていなかった未知の世界への航海が始まりました。

エンジンもなく風頼り。現在の船舶とは比較にならない当時の帆船での船旅は、それは過酷な長旅で、目的地に着く頃には船団や船員の数が激減したりしていたそうですが、行き先の土地を植民地として獲得できて、土地の宝である資源を得ることはそれに見合う以上の見返りがあったことに間違いありません。

最初に最も幅を利かせていたのはポルトガルとスペインで、カナリア諸島辺りで両国は地球上に南北大きく線を引き、東西を二分割してヨーロッパ以外の領土の支配権を決めるトルデシリャス条約なるものを作りました。イギリス、フランス、オランダなど他の強国は勿論そのことに不満でした。

当時のヨーロッパ以外の土地では、科学技術が遅れていたため、ヨーロッパ人がそれらの土地を支配するのはとても簡単なことでした。

アメリカ大陸を発見したヨーロッパ人も、そこに元々住んでいた現地人を西洋の発達した武器の力によって、まるで赤子の手でもひねるかのようにいとも簡単に支配してしまいました。

そのヨーロッパ人たちとは、イギリス、スコットランド、フランス、スウェーデン、スペイン、オランダ、フィンランド、デンマーク、ノルウェーなどの国の人たちでしたが、アメリカ大陸で植民地化に最も成功していた国のひとつはイギリスでした。

北部の13の植民地に移り住んだイギリス人たちは、そこに住んでいたインディアンたちを大量虐殺して残りを隅に追いやり、自分たちの生活空間を作り上げました。こうして、アメリカ大陸は1492年から1776年までの約300年の間、スペインがフロリダやカリフォルニア、フランスが五大湖の上下、オランダがニューヨーク、スウェーデンがデラウェア、ロシアがアラスカ、イギリスがバージニア他を植民地にしました。

そしてアメリカに移り住んだヨーロッパ人たちは当時最も力の強かったイギリスに反抗して戦争まで起こして1776年にアメリカという国を作ってしまいました。西部劇ではインディアンがまるで野蛮な悪者かのように騎兵隊にやっつけられていますが、実際のインベーダーはどちらだったのでしょうか？

インディアンたちは、本当は哀れな被害者ではないでしょうか？

インディアンたちにとっては当時の領土略奪と虐殺は今だに忘れられず、コロンブスの上陸を記念する「コロンブス・デー (10月第2月曜日) 」は、インディアン虐殺の象徴日として毎年、全米で抗議行動を決行する日だそうです。

スペインやポルトガルは南アメリカも手に入れました。それまでそこに住んでいた人たちは全く無視されるかのように、ヨーロッパ人によるアメリカ大陸の新しい歴史がヨーロッパ式の書類上で誕生することになったのです。正に勝者が書く歴史です。

さてその後、アメリカ人という新しい国の人間に生まれ変わったヨーロッパ人たちは、力ずくで自分たちの国にしたアメリカだけでは飽き足らず、今度は海を越えて西へ西へと侵略を進めました。その犠牲となった例のひとつはハワイです。

ハワイはそれまで王国でした。アメリカからの侵略の危機を察した国王が、当時日本の明治天皇を訪問して助けを求めたのは知る人ぞ知る事実です。アメリカは他にもそれまで300年間もスペインが植民地として支配していたフィリピンを奪い取りました。

イギリスは中国、インド、ビルマ(現ミャンマー)、マラヤ、シンガポール、マレーシア、ブルネイ、フランスはインドシナ(カンボジア、ベトナム、ラオス)、オランダがインドネシア、ポルトガルが東ティモールなどを植民地にしていました。

その頃の東南アジアはタイを除いてどの国もヨーロッパやアメリカの植民地となってしまっていました。香港人がそれを望むか望まないかはさておき99年間もイギリスの植民地となっていた香港が中国に戻ったのは1997年のことです。

アメリカという国は、世界の警察などと呼ばれることがありますが、実は本当のところ、世界の暴れ者「ジャイアン」なのです。

昔から懲りずに戦争のきっかけを作っては相手をやっつけるという無法者です。ヒーローが尊ばれる国ですが、それはヒーローでも何でもなく、単なる暴れ者なのです。

アラモの砦

メリー号　スペイン　撃沈　スペイン人を悪者に

真珠湾　日本人を悪者に

ベトナム戦争　トンキン湾事件捏造　ベトナム人を悪者に

湾岸戦争　フセインを悪者に

アフリカ大陸は、1884年にドイツのベルリン会議でイギリス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ベルギー、デンマーク、スペイン、アメリカ合衆国、フランス、イタリア、オランダ、ポルトガル、ロシア、スウェーデン、オスマン帝国の計14カ国によってズタズタに分割されてしまいました。そこで今日のアフリカ各諸国の国境線には一直線である部分が目立ちます。

16世紀から500年程に及ぶ長い間ヨーロッパ人に支配されていた東南アジアやアフリカが独立できたのは第二次世界大戦の頃からです。一体どうしてでしょうか。

ヨーロッパ人イコール白人、その他の民族は有色人種ということで、科学技術が発達していた白人は、それが遅れていた有色人種を差別をして虐げていました。白人にしてみれば、有色人種は彼らと同じ人間ではなく、家畜程度であったのです。だからこそ人身(奴隷)売買などが日常茶飯事に行われていました。

有色人種は人間ではないだけにその虐げられ方には凄まじいものがありました。同じ人間とは思えない仕打ちを受けた上、富や財宝、資源は本国に持って行かれてしまったのです。イギリス王室をはじめとする、ヨーロッパ先進国の王族の繁栄は、そういった植民地の悲惨な犠牲の上に成り立っています。

# 2 - その頃の日本は？

さてその頃の日本は戦国時代でした。その戦国時代よりもさらに2、3百年ほど遡った頃、ジパングと呼ばれる日本で知られる東方見聞録で有名なマルコポーロは当時、中国まで来ていたものの日本には寄っていないそうです。

マルコポーロから、日本には黄金が溢れているという情報を得たことから、その当時強大だったモンゴル帝国のクビライがその富に興味を示して元冦が起きたという説がありますが真相のほどは分かりません。

そういう意味では記録に残る最も古い訪日外国人は、種子島に鉄砲を伝えたポルトガル人たちでしょうか。その頃に日本に来た外国人の中でも最も日本人に知られているのはフランシスコ・ザビエルでしょうか。

教科書には出ていないので、ザビエルからは当時の単なる宣教師の印象を受けますが、彼は相当の数の若い日本人女性をヨーロッパに無理やり連れ去るなどの悪さを働いているそうです。ザビエルは当時、何をしに日本に来たのでしょうか？ 有色人種の国々が、次々と西洋人によって植民地にされていた時代です。

日本にだけは例外的に宣教のためだけに来ていたのでしょうか？ それはあり得ないと考えるのが普通ではないでしょうか。当時の日本も他のアジア諸国と同じように、西洋の植民地となる危機を迎えていたのではないでしょうか。黒船来航により開国にいたるまでの江戸時代260年間、世界的に見ても珍しい鎖国などということをしてしまうことにもうなずけるものがあります。

フィリピンのように300年間もの長い間、スペインなどのような西洋諸国の植民地となるか、あるいは鎖国をして国を守るか。日本には武士という強くて怖い存在があったから西洋人も手を出せなかったという説があります。当時、アジアで西洋の植民地にならなかったのは、日本とタイだけでした。

タイはインドとビルマ(現ミャンマー) を植民地にしていたイギリスと、インドシナ(カンボジア、ベトナム、ラオス) を植民地にしていたフランスとの丁度中間に挟まれていました。どちらの国もタイを虎視眈々と狙っていたようですが、両国の植民地に挟まれて睨み合いの中心にいたお陰と、巧みな外交によりイギリス対フランスの争いの緩衝材として植民地にはならずに済んだようです。

では日本の方はどうして西洋の植民地にならずに済んだのでしょうか。そこには２つの大きな理由があったと思います。その１つはやはり武士の存在です。殿様のためや自分の名誉のためなら命も惜しまずに戦う武士という存在は、地球広しといえどもそうはいません。

西洋人が恐れる武士という存在を最も分かりやすく示した例は「生麦事件」ではないでしょうか。様々な本やインターネットサイトで説明が出ていますので、詳しくはそちらを見ていただくとして、ここでは簡単にまとめます。参勤交代で江戸から戻る薩摩の殿様の「下〜に〜、下〜に〜」の大名行列と、馬に乗った4人のイギリス人商人が横浜、生麦村の狭い街道ですれ違ったそうです。

その4人のイギリス人は馬から降りずにそのまま殿様が乗る籠に近づいてしまいます。殿様を守る役目の武士がそれを見逃すわけがありません。「無礼者！」とばかりに切られてしまいました。1人は亡くなり、2人は重症。1人助かった女性はアメリカ領事館に駆け込んだそうです。

幕府が高額の賠償金を支払うことになり、事件はその後薩英戦争にまで発展しました。薩英戦争とは、日本対イギリスではなくて数ある日本の中の一潘にしか過ぎない薩摩とイギリスの戦争です。それまでアジア諸国で傍若無人で無敵だった西洋人を驚かせた事件であったことには間違いなさそうです。

他にも「英国公使館焼き討ち事件」や、長州藩一潘がイギリス、フランス、オランダ、アメリカの四国を相手にした「下関戦争」など、当時日本に来ていた西洋人たちに、「この国は一筋縄ではいかない…」と思わせたに違いありません。

以下は、当時日本を訪れた西洋人が残したコメントの記録です。

「日本は何らかの征服事業を企てる対象としては不向きである。(中略) 国民は非常に勇敢で、しかも絶えず軍事訓練を積んでいるので、征服可能な国土ではない」

アレッサンドロ・ヴァリニャーノ　イタリアカトリック教会司祭(1539～1606)

「日本は決して武力で押さえつけることはできない」

「この国民は信用すべしと認められる。彼らは第一の目的である名誉に邁進する。また恥を知るをもってそぞろに他をそこなうことは無い。彼らは名誉を維持するためにはよろこんで命を捨てる」

フランソワ・カロン 台湾オランダ領行政長官(1600～1673)

 「日本大王国志」 幸田成友訳、平凡社東洋文庫

 「彼ら(日本人) は誇りが高くて面目を重んじるので、名誉に関することで簡単に命をすてることもいとわない。同様に、自分の保護と援助の下に身をおいている者のためには、無造作にわが命を賭ける」

「彼らは侮辱や悪口を我慢しないし、また人の面前でそれを言い出すこともしない。 ．．．したがって、いさかいは稀である。というのは、いさかいをする者は死を決意するからであるが．．．」

ジョアン・ロドリゲス カトリック教会司祭(1561～1633)

そして２つ目は高い技術力を持っていたことです。

種子島に鉄砲が伝わった時に、その威力に度肝を抜かれた島主種子島時尭は、火薬を家臣笹川小四郎に、鉄砲を鍛冶の八板金兵衛に命じて作らせたそうです。暴発の欠陥を改良するなどには苦労があったそうですが、僅か数年の間には完成して広まりました。

当時、無敵で名高かった武田軍の騎兵隊を織田信長の鉄砲隊が破ったことはよく知られています。

16世紀末、日本は最も多くの鉄砲を作って保有、さらには輸出をしていた武器輸出国であったそうです。(出典:「鉄砲を捨てた日本人」、ノエル・ペリン、中公文庫)

そしてそれを裏付けるような当時の訪日外国人のコメントもあります。

「実用的、機械的技術において日本人は非常に巧緻をしめしている。(中略) 彼らの手作業の技術の熟練度は素晴らしい。日本の手工業者は世界のいかなる手工業者にも劣らず練達である。

よって国民の発明力が自由に発揮されるようになったら、最も進んだ工業国に追いつく日はそう遠くはないであろう。他国が発展させてきた成果を学ぼうとする意欲が盛んで、学んだものをすぐ自分なりに使いこなすことができる。

だから、国民が、外国との交流を禁止している排他的政策(鎖国) が緩められれば、日本はすぐに、最も恵まれた国の水準までに達するであろう。文明世界の技能を手に入れたならば、日本は将来きっと機械工業の成功を目指す強力な競争国となろう」

マシュー・カルブレイス・ペリー 海軍代将、黒船指揮官 (1794－1858)

「物質的文明に関しては、日本人が全ての東洋の国民の最前列に位することは否定しえない。機械設備が劣っており、機械産業や技術に関する応用科学の知識が貧弱であることを除くと、ヨーロッパの国々とも肩を並べることができるといってもよかろう」

「もし日本の支配者の政策がより自由な通称貿易を許し、日本人をしてバーミンガムやシェフィールド、マンチェスターなどと競争させるようになれば、日本人もそれにひけをとらず、シェフィールドに迫る刀剣や刃物類を作り出し、世界の市場でマクリフィールドやリヨンと太刀打ちできる絹製品や縮緬品を産出するだろう」

ラザフォード・オールコック　医師、外交官、初代駐日英国総領事(1809～1897)

「従順で礼儀正しく才気があり、親切で人をだますこともなく、美徳と正直な話をすることについては近年発見された他のあらゆる国に優るが、たいそう自分の評判に固執し、最も尊ぶのは名誉である」

「好奇心が強く、しつこく質問し、知識欲が旺盛で、質問はきりがありません」

「とても気立てがよくて、驚くほど理性に従います」

「日本人は、地球が丸いことや太陽の軌道を知りませんでした。でもその大部分が読み書きできます」

「日本人はこれまでに発見された他のどこの国民よりも、徳行と廉直の点で優れている。その性質は温和で、瞞着を排し名誉を切望し、名誉こそ最高のものであるとしている。貧困は彼らの間ではふつうのことで、苦労して貧困に耐えるけれども、それは決して不名誉のこととはしない」

フランシスコ・ザビエル　(1506‐1552) カトリック教会司祭、宣教師

「.... 彼らを野蛮人とみなしたもう事なかれ。信仰のことはともかくとして、我々は顕著に彼らより劣っているのである。私は国語を解し始めてより、かくも世界的に聡明で明敏な人々はいないと考えるにいたった。ひとたび日本人がキリスト教に従うならば、日本の教会に勝る教会はないであろうと考える...

....この国民は野蛮でないことはご記憶ください。なぜなら、信仰のことは別として、私たちはたがいに賢明に見えるが、彼らと比較すると甚だ野蛮であると思う。私は、真実、毎日、日本人から教えられることを白状する。私には、全世界で、これほど天賦の才能を持つ国民はないと思われる」

オルガンチーノ イタリア人宣教師(1561～1633)

260年間もの長い間鎖国をしていたので、当時の西洋の進んだ科学技術は伝わりませんでした。だから開国をした当時に西洋と日本のそれを比べた場合、確かに日本の技術は全般的に遅れていたようです。

それでも鎖国中の日本で分野によっては独自な技術は蓄積されて、その中には世界のトップレベルを行くものもありました。微分積分学をニュートンやライプニッツよりも早く、そしてベルヌーイ数をベルヌーイよりも早く発見していたと言われる関孝和という偉大な数学者や、サテライトを使った最新の地図とほとんどかわりのない日本地図を既にあの当時に完成させていた伊能忠敬、江戸時代の発明家平賀源内などの存在、東洋のエジソンと言われたからくり人形の田中久重の作品などは、今日の技術をもってしても作れないそうです。

他にもアレッサンドロ・ボルタが電池を発明後、世界で始めてマンガン乾電池を発明した屋井先蔵、近代では内視鏡検査・胃カメラの東京大学医学部附属病院医師、宇治達郎とオリンパス光学、胃がんの早期発見で胃鏡は1868年、ドイツのクスマル、1898年ドイツのランゲが胃カメラを試みるものの、患者の苦痛が大きくて実用化ならず、ファイバースコープ付胃カメラに使う光ファイバーの発明などはその後の西澤潤一によります。そして芸術の面では、「全ての自分の作品は、多かれ少なかれ浮世絵の影響を受けている」とあのゴッホが書き残しています。

# 3 - 明治維新と日清、日露、第一次世界大戦、そして大東亜の四つの戦争

260年間もの長い間の鎖国の後に、黒船を始めとする西洋諸国からの強い圧力によってついに日本は開国しました。開国したというよりはさせられたという方が正しい表現であるのは、当時の西洋諸国と結んだ条約がことごとく不平等であったことが示しています。約束を守る国民として未だに日本人は条約・契約書に弱いですが、当時も苦手から苦手で次々と不利な条約を結んでしまったのです。

それでもそれまで続いた幕府の旧体制から、多くを西洋諸国に習った明治政府が誕生して成長しました。日本は過去にモンゴルと朝鮮に攻められた二度の元寇や豊臣秀吉の朝鮮出兵などを除けば、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第ニ次世界大戦と今まで四回の戦争を経験しています。

どの戦争も例外なく外敵の脅威に晒された結果、自国を守るべくしての戦争だったことが分かります。先ずは最初の日清戦争。間に位置する朝鮮は地理的にいつも苦労する立場にいるのですが、朝鮮における日本と清のせめぎ合いから両国の戦争になり、「眠れる獅子」と言われた大国である、3倍近い大軍の清を相手に劣勢の日本が勝利してしまいました。

そしてさらにはその後僅か10年経つかたたないかの時を隔てての日露戦争。南下の脅威があった清以上の大国ロシアとの戦いで、これも世界中の予想を裏切るかのように日本は勝ってしまいました。勝てた理由はかなり興味深いので是非一度ご自身で詳しく調べていただきたいのですが、日本の勝利にはとにかく世界が驚きました。

その勝利は、当時大国に虐げられていた東ヨーロッパの国々やトルコなどに大きな勇気を与えました。東ヨーロッパに親日の国々が存在するのはそういう理由もあります。日露戦争に関しては、第二次世界大戦が始まった時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトのコメントが残っています。

「日本に同情を寄せている．．．　日本は正義のため、人道のために戦っている。ロシアは近年各国に向かって悪逆無道の振る舞いをしている。とくに日本に対しての処遇は、はなはだ人道に背き、正義に反した行為である。今度の戦も、ずっと初めから経緯を調べてみると、日本が戦をせざるを得ない立場になっている。よって今度の戦は日本に勝たせねばならぬ。そこで吾輩は影になり、日向になり、日本のために働く」

このように好意的で終戦の講和条約を取りまとめてくれたセオドア・ルーズベルト大統領でしたが、その従兄弟でその後やはり大統領になったフランクリン・ルーズベルトが、大東亜戦争が始まるトリガーを引いたのはとても皮肉なことです。

彼は自分の国の国民に対して、自国の若者を戦争に巻き込むなどということは決してしないと公言したにもかかわらず、アメリカを戦争に巻き込むために日本への石油の輸出をストップするなどして日本を戦争に追い込みました。日露戦争の時にセオドア・ルーズベルト大統領が言った、「…経緯を調べてみると、日本が戦をせざるを得ない立場になっている…」という発言を、日本がアメリカの占領下にあった時の連合国軍GHQ最高司令官マッカーサーが第二次世界大戦後にしているというのはとても興味深い事実です。

敗戦国となった日本は、とても強かったがゆえにアメリカから恐れられていましたが、有色人種であるということもあって、戦後のGHQの制裁には想像を絶するものがありました。当時のニューヨークタイムズのドイツが降伏した時の社説です。

「我々は勝利してよかった。だが、ドイツ人とは本来友人であり、ドイツ人は優秀だから、将来を見据えて、彼らがナチスを排除するなら、我々はドイツの再建に協力していこう」 と、書いてあったそうです。

そして日本が降伏した時の社説には、恐ろしく大きなナマズのような化け物がひっくり返って口を空けていて、やっとこを手にしたGIが数人で牙を抜こうと格闘しているイラストが付き、「この怪物は倒れたが死んだわけではない。我々はこの化け物の牙と骨を徹底的に抜き去らなければならない。

この作業は戦争に勝つよりも難しいかもしれないが、アメリカは自分のためにも、世界のためにもこの作業を続けなければならない」と書いてあったそうです。(「勝つ日本」石原慎太郎著)

その制裁とは例えば、東京裁判という名の元に、戦勝国が敗戦国日本の戦争に関わった軍人や政治家を有無を言わせずに死刑などに追い込むというものでした。戦争をリードして、勝っていれば国のヒーローとなっていた人たちがA級戦犯、B級戦犯、C級戦犯などというものに分けられてことごとく処刑されてしまいました。

それは裁判などとは決して呼べない正にリンチでした。そのリンチがいかにひどかったかと言うと、「平和に対する罪」 などという戦時中には存在しなかった罪を戦後に作って無理やり押し付けられたのです。後で作った法律で、過去の行為を罰するというのはどういうものでしょうか？

例えばその昔、オートバイに乗るのにヘルメット着用は法律で決められていませんでした。つまり、ノーヘルが合法でした。その後オートバイが増えるにつれて事故も増え、ヘルメット着用は法で定められ、ヘルメットをかぶらずにオートバイに乗ると違法になりました。

その法律ができる以前にヘルメット無しでオートバイに乗っていた人たちを、後から作った法律で罰することができるでしょうか。最も残酷なことは、GHQによって日本のほとんどの国民がリンチを裁判、ヒーローを戦争犯罪者と思い込まされてしまったことです。同じように、当時自分の命をかけて日本を守ってくれた私たちのひいおじいさんたちは、GHQに洗脳されてしまった心ない朝日新聞や反日の人たちによってでっち上げられた慰安婦問題や南京問題等によってその名誉を著しく汚されてしまいました。

# 4 - 世界トップレベルの技術力

日本における戦後の目覚ましい経済成長は世界中から注目を浴びましたが、それは正に幕末の頃に黒船の船長ペリーや初代駐日英国総領事のオールコックが当時既に予想した通りとなりました。つまり日本には、当時から訪日外国人にそれを予想させた高い技術力の裏付けがあったのです。

高度経済成長を続けた昭和時代、ペリーやオールコックが予想した通りに日本は様々な優れた工業製品を作り出しては世界に輸出して世界中で高いシャアを獲得しました。カメラ、オートバイ、腕時計、ロボット、工作機械などのいくつかの業界では世界でダントツのシェアを獲得するまでになりました。しかもそれら世界中で大ヒットした、「写るんです」の低価格カメラから、ニコンやコニカの高級一眼カメラ、腕時計、ラジオ、ウォークマン、電卓、自宅にいながら映画を観れる家庭用ビデオ、DSやゲームボーイ、カラオケなどの電気製品、インスタントラーメン、冷凍、レトルト食品などまで、その多くが人類の生活に貢献したり人々を幸せにするためのものでした。

「歌に対する人類の夢を具現化した機械・カラオケは、その誕生から30年を経ずして全世界に普及しました。世のさまざまな文化流行を見ても、これほど短期的に、これほど広範囲の普及をみたものはない」

ジョウ・シュン、フランチェスカ・タロッコ、ロンドン大学歴史家研究員(カラオケ化する世界)。

御木本幸吉による真珠の養殖成功は、あのトーマス・エジソンに、「これは養殖ではなく、真の真珠だ。実は自分の研究所でできなかったものが二つある。ひとつはダイヤモンドで、いまひとつは真珠である。あなた(御木本幸吉) が動物学上からは不可能とされていた真珠を発明完成されたことは世界の脅威だ」と言わせました。

ソフトの面でも例えば黒澤明監督がスピルバーグ監督やジョージ・ルーカス監督から、その作品の中で黒澤明監督の作品が偲ばれるシーンが再現されたりするほど影響を受けて慕われたり、アニメなどは今日でも世界中で大きな影響を続けています。現在の世界トップクラスのサッカープレーヤの多くが、あの「キャプテン翼」を読んで大きな影響を受けたことは知られています。

また、謙虚を美徳とする国民性は世界中で評価を受けています。東日本大震災の時に日本人が見せた態度もその一つですが、オンライン旅行会社であるエクスペディアが毎年世界中のホテルマネージャーに対して泊まり客の評価を行うアンケート「ベストツーリスト」でも多年トップの座に輝いています。

# 5 - 日本(人)の使命

最後の章になりましたが、ここでもまずは過去の訪日外国人のコメントを取り上げて始まります。

「日本人としての誇りを持ち、かつ外国人から学ぼうという謙虚な姿勢のために、日本は今日の世界の中で重要な位置を占めるようになったのです」

キャサリン・サムソン 英国外交官夫人(1928～1936日本滞在)

著書 「 東京に暮らす」より

「一度も外敵によって滅ぼされたことのない日本には、”人類の幸福の敵を滅ぼす” 使命がある... ”万国に優れて統一のある民” として、来るべき一切の統一に貢献する使命を持つ。 ”戦士” として、”人類の平和” を促す義務が生じる」

ポール・リシャール(1874～1964) フランスキリスト教牧師、弁護士、詩人。「告日本國」社会教育研究所

「外国からやってくる旅行者の誰もが、この国民から深い恩恵を覚えることは確かです。それほど日本人は世界でも際立つ興味深い民族で、しかも感謝の念は特定の個人にだけでなく日本全体に強く感じます」

1900年の北清事変(義和団事件)で、日本の軍隊が武勇、規律、装備、敗者への人道的処遇の点で他国より優っていて、卓抜した愛国心を発揮したと絶賛。

「この魅力的国民に待ち受けるものは、何かとても良い運命であることは確かです」

エリザ・ルアマー・シドモア(1856～1928)地理学者、著作家

ナショナルジオグラフィック理事

 「シドモア日本紀行　明治の人力車ツアー」外崎克久訳、講談社学術文庫

「私がどうしても滅びて欲しくないひとつの民族がある。それは日本人だ。あれほど古い文明をそのままに今に伝えている民族は他にはない。日本の近代における発展、それは大変目覚しいが、不思議ではない」

「日本は太古から文明を積み重ねてきたからこそ、明治に入り欧米の文化を急速に輸入しても発展できたのだ。どの民族もこれだけ急な発展をするだけの資格はない。しかし、日本にはその資格がある。古くから文明を積み上げてきたからこそ資格がある。彼らは貧しい。しかし高貴である」

パウル・ルイス・チャールス・クラウデル(1868～1955)

フランス劇作家・詩人、駐日フランス大使

「私の予想ではおそらく21世紀は日本の世紀になる」

李登輝元台湾総統

「21世紀は日本の世紀になる」

 ハーマン・カーン(1922～1983)未来学者、軍事理論家

別冊”正論” 2014年4月号

これらのコメントを見てどう感じるでしょうか？　嬉しくならない人はいないでしょう。「言い過ぎではないか？」と思う人も多くいると思います。でもここで驚いたり自己陶酔している暇はありません。

当然のことながら、この本の目的は自画自賛や自己陶酔ではありません。この本で最も大事なことですが、日本人は今こそ兜の緒を締め直す時にきていることを知っていただきたいのです。

今から34年前に亡くなられ、生前は歴代の首相の相談役を務めるなどの偉人であった安岡正篤さんが、当時既にその頃の日本を憂いていました。

貴重な内容なので、私が管理人を務めます、「頑張れ日本.com」のホームページにもあるその文章をここで一度ご紹介いたします。

内外の状況を深思しましょう。

このままでいけば、日本は自滅するほかはありません。

我々はこれをどうすることもできないのでしょうか。

我々が何もしなければ、誰がどうしてくれましょうか。

我々が何とかする他ないのです。

我々は日本を変えることができます。

暗黒を嘆くより、一燈をつけましょう。

我々はまず、我々の周囲の暗を照らす一燈になりましょう。

手の届く限り、至る所に燈明を供えましょう。

一人一燈なれば万人万燈です。

日本はたちまち明るくなりましょう。

これ我々の万燈行であります。

互いに真剣にこの世直し行を励もうではありませんか。

安岡正篤さんが故人となって早34年、果たして日本は良くなったでしょうか？ 安岡さんの憂いは命中し、世の中は少しづつ悪くなっていないでしょうか？

他にもあの偉大な経営者、松下幸之助さんが1980年に当時の政治を嘆き、私財を投じて松下政経塾という政治家育成の学校を作りました。その学校の卒業生として初めて首相となった野田政権も誕生しましたが、彼の元で日本は少しでも良くなったでしょうか。

これは鍵山秀三郎さんの言葉ですが、国を良くするのは首相でも、政治家でも、官僚でも役人でもありません。私たち国民一人ひとりなのです。国民一人ひとりの心構え、行いが集まって、村＞町＞市＞県＞国の姿になります。

とても簡単な例で言うとタバコのポイ捨てです。「タバコの吸殻ひとつくらいはゴミにならないから...」とか、「どうせ市が掃除をしてくれるから...」という、自分勝手なエゴから来ます。そういうエゴが集まると、国もたちまち悪くなってしまいます。

人、一人の存在は自分の両親(２人)、おじいちゃん、おばあちゃん(父親、母親両方で４人)、さらにその親たち(８人) というように辿っていくと、倍々ゲームのように10代も遡れば1.024人。15代遡れば３万２千人以上、20代では何と100万人もの親の親たち、つまりご先祖様たちと繋がっていることが分かります。江戸時代の徳川家は僅か15代で260年。

つまり20代遡るなんてまだまだ最近のことです。ちなみに49代(徳川家と同じ比率で計算して)850年も遡ると、560兆人ものご先祖様たちと繋がっています。人類皆兄弟という言葉はあながち嘘ではないのです。

猿から分かれた人間の歴史はとても古く、それを考えると、人、一人の存在というのはとんでもない天文学的な先祖たちと繋がっていることが分かります。もしその内の誰か１人でも欠けていたら自分の存在はありません。自分の存在、命というものは、そのくらい尊いものなのです。その尊い命が、欲の延長である戦争やテロで 奪われ続けています。

世界の中の日本という国、日本人という民族のことを本当に良く知り、このような国の民族として生まれてきたことに誇りと自信を持ち、本来の日本の良さを世界に広めるのがこの21世紀の日本・日本人の使命・天命なのです。

日本は大東亜戦争で負けて、GHQの洗脳で自虐史観に陥ると同時に西洋の利己主義、個人主義がはびこり、楽で便利な環境の中で茹でガエル状態となってしまいました。そういう意味で今はとても危険な状態です。このままでは本当に茹でガエルになってしまいます。

問題は、日本人の長所に表裏一体で付いて回る短所です。万物に長短共にあり、長所のみのものなどこの世に存在しません。あるアンケートによると、日本人の父兄に「自分のお子さんに何を望みますか？」という問いに対して返ってくる7割の答えは「人に迷惑をかけない人間になってほしい」だそうです。そんな答えが返ってくる国民は世界広しといえど日本くらいではないでしょうか。

日本人の優しさは日本語とも関係しているかもしれません。ドイツに来たばかりのドイツ語をまだ理解しない日本人が、ドイツ人同士の会話を聞いているとまるで喧嘩をしているように聞こえることがあるそうです。ところが、そんなドイツ人が日本語を習ってしゃべってみると、とても優しい人になってしまいます。

日本語の表現が人を優しくしてしまうのでしょうか。日本人の優しさは、日本語の中にもその秘密が隠されているように思えます。太古の昔から海に囲まれて守られ続け、大陸では当たり前の国と国との間の争いなどとはほとんど縁がなく、長い間の肉食狩猟民族ではなくて草食農耕民族として日本人は優しく進化したようです。

エクスペディアというインターネット旅行会社が世界中のホテルのマネージャーに、どの国の宿泊客の印象が良いか毎年アンケートを取っています。多くの年のトップは日本人だそうですが、謙虚を美徳として礼節をわきまえる民族なら当然のことです。

でも問題なのはその優しさ、譲り合いが外交では通用しないことです。なぜなら外交では国益がガチンコする正にガキの喧嘩と同じ場。例えば教科書問題。以前、学校の教科書の中で「侵略」という単語を「進出」に直したという偽情報で「今後は近隣諸国(中韓等)に配慮する」という談話を宮沢喜一官房長官が発表しました。

蓋を開けてみればその情報は嘘で、最初から「進出」となっていたそうです。つまり、嘘の情報で中韓の顔色を伺って謝ってしまったわけです。

あるいは「先の戦争は侵略戦争」という細川首相の明言。そして村山首相の「植民地支配と侵略」としてお詫び、小渕首相の(戦争責任の)「反省とお詫び」という明言．．．反日派の主張を後先のことも考えずにそのまま受け入れて謝ってしまう国民性が問題です。

そういう国民性であるがゆえに多くの人たちは素直にGHQの洗脳に染まってしまい、それは終戦後70年以上も経った今でも変わりません。

ドイツには昔、交通事故に遭って虫の息である日本人学生が、集まってきた人々に迷惑をかけて悪いと感じたのか、車に轢かれた被害者であるにもかかわらず、謝るような発言を拙いドイツ語でしてしまったそうです。勿論ドライバーは無罪となり、轢かれた彼が悪かったんだということになったそうです。

日本の常識は世界の非常識と言われます。本来は良いことでも、その良さの発信のTPOを間違えると命の問題になることもあり、慰安婦問題や南京問題のように長い間ずっと子孫にも迷惑をかけることになります。

「謙虚は美徳」、「譲り合い」は美しいことであることには間違いありません。世界を平和に導くのは、決して利己主義や個人主義ではありません。譲り合うからこそ平和になるのです。でも単に譲るだけでは前述のように反日にいいようにされてしまったりします。

弁護士の数を比べてみると良く分かりますが、日本では約4.500人に1人の割合で弁護士が存在する計算になるそうです。その割合がドイツでは約560人に1人になります。アメリカは約30人に1人。この数字を見ると、日本ではいかに争いごとが少ないか、争いごとを弁護士無しで解決してしまっているかが分かります。

これは武田邦彦教授から気付かされたことですが、日本人が喧嘩をする時に「表へ出ろ！」という啖呵がありますが、西洋ではその場の迷惑などを考えずに喧嘩はすぐにその場で始まってしまいます。戦国時代の戦争も、例えば関ヶ原の戦いなどのように民間に被害が及ばないように広い場所で行い、西洋のように町を戦火に巻き込むことは避けるようにします。

戦後から70年以上も経った今、一刻も早く勝者が書いた嘘の歴史から目を覚まし、本当の日本の近代史を知り、日本人という誇りある国民として利己主義に凝り固まり自己主張をするのではなく、譲り合いの精神を世界に広めて貢献するのが私たち日本人の使命ではないでしょうか。

その具体的な方法としては、まずは日本人の民族性である気遣い、気配り、謙遜、謙虚、謙譲です。